中村俊定文庫
文庫 18
55
2

中村保定文庫
保定藏

吉野の山乃秋風小夜ふけてふるさとさむしころもうつなり

○ 雪うちしきしひいらぎ袖の香

やまうちや弱とともあわんかしこん

弱ゆえてかれ枝ものるさの浪とれ雪乃夕暮

やまと屏ハ山やんりとくまん

桂ゑ乃ハ花の陰とともかりあるよ

菊と地ハ原山賤乃花の陰に休るとゝろ

四十五 三月 白に赤寄此桐ゝ千ゝ

ゆめゆめやゝに付へ十

歌と付白ハ千歌と

我拍打ひらくとやしあ侍
出相もいはぬる国乃ひとりてて
相もとうち拍手ぬ国の侍ぬ雖ありあん
いくくりれの流れ出しん
花よりやあ方を侍ぬ花れ紙給
俺なれ分とう紙花紙給て侍ぬ
四十六
一人のお多和る秋とし現紙お丸へ
ひとりも拍てれ打ひ侍る
遠方へても丸ひ侍る同しる

ちとちゝ月をタれ乃ち事
立ぬう侍う角けあそまう紙
月相す相うとへ下の苦ぬんこてあ侍ぬ
いくく通あも主乃ちるう侍
タ多紙よ焼やうしは火吉打りひ
多あへ主月尾の庵乃多紙よ焼やを主乃紙を三れて
あくあんそうひとまりり
笑侍るとうあくあ主この刷をせん
立侍とう侍場尓野の橋紙乃れ侍ぬ中侍て侍打る

あひみそめしのちよりこのかた
しいとも蛭ハ尺とはるもとにき
ゑせてこそ人をさめしにあるとて
若せてこそ人をさめしにあるとて
若乃ひとをまて命をあれ
うゑをもへしくれ白石をもて
我君千代をかさねとて君ハ
秋風よ鳴蟲ハ毎月くく
下六

はのくとはゝ乃浦ハ新春に詠ゝ
四方の海をとゝ
新波ハやむ
新波ハ
ゆるさハけ
又あひ人をとゝ
神ハ
抜てハ
抜ハ

秋彩の下もうつろふ今日やなほ人のいねてにもる
若草もうつろふ色に秋の初
さやうなるこそ夕ねの夕月夜
秋景ぬと同じはさやうに
若草の本陰の
若草とはしとやんむ
若草とて宮はのもとであるうつろふ
落葉ふうこそきくあの声
りん唐土もうつろやきこうん

きのふの月花ともり和歌秋の寝覚の月
はむかしを世にくれなゐ
ひとあるこの和歌れとの素
ちくあるや志賀の都ハあれにけりと若あるこれ山桜れ
中歌撰人不知と今これと大度の奇と知ること
ふるを待えて赤まつる神
紫せ一数あるこれはそれ
あるこあるはくまれるうとせん雅の人のあのねん
はくまとせぬとろうとも

夏のより来ハ[illegible]の声

郭公なる梅とうそ[illegible]

郭公鳴つるまと添[illegible]

徒我[illegible]

人の[illegible]

梅の花[illegible]

[illegible]

[illegible]

世中[illegible]

卅七

本歌乃人[illegible]

常[illegible]

[illegible]川淀舟とて 狂言師

[illegible]川淀の清水面[illegible]

淀舟ハ狂言乃一名なり

いつ[illegible]

滝の名[illegible]

いつ[illegible]

○ 神[illegible]

余所よりのぞきてよめる

春にのこりとときこえしうぐひすの神よ落ちれ
こちのこうちのこの春の声

うぐひすの一ひらくれなゐ落ちてり

四十八

所見紙にかきつけおくとおもはせたん
一首句よりの歌乃初句を出とおもつて付るなとし
付りにまた奇の詞と云出をよへ

うぐひすの神よりかれる屋敷
山乃端よりのぞきしのあけの月　正章

伊勢物語水無瀬の宮にて
歌よみて酒のむ物語してあるうちに夕さりになり
今ひとつとて十一日乃月出るまでとそれ
もこの右なれこの
ありつるかたちなりけり
神乃ちかうやはひ板しき
塩竈にいたりて磯と歌一へ　重光
同物語ふねにのりてわたりけるとこの
むかしこれにあるとおもうてゆくすゑ

[illegible]

[illegible]

この河は流れつゝ八月ばかりとなれとも今[illegible]

[illegible]ゝと流すなり　これ物語みるもの

あるとしつきの影ばかりとゝ

業の道をたゝ[illegible]　四章

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百人一首歌枕　秋乃田の露

秋の田の[illegible]　貞徳

とゝんしてゝる句也

大江の山うた不業内なる

小式部うたと業の[illegible]

大江山業[illegible]

和泉式部保昌よりして丹後国より[illegible]

歌合のあり侍りしに小式部内侍歌合の後行事のと
中納言定頼侍りしの[illegible]
いくさをのの舟橋へ[illegible]
てもしらや心をとゝまく笑をゝん[illegible]
立帝の紀引給へく後けり
○ 帝紀行幸ひて病ゝとゝまる
落くゝ[illegible]紀野ゝ色れ緑の[illegible]
落く濃野の緑の[illegible]
この[illegible]

[illegible]の行[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の袖[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

四十九

一本歌の心詞かへて付る句

[illegible]

[illegible]

[illegible]

貞徳

[illegible]

貞徳

[illegible]

[illegible]

これはの羊歯の風ぞ新鶯して

うぐいす[illegible]の屋ろさと

はるの南風ふかれてうぐいす[illegible]の里

山[illegible]ろ[illegible]やうむ[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わかれて後山路乃露のかわくまもなくて我ハ又我と思はん
後ハ伴捲物語よむとて心を叢雨ありあちち
うらありけりとせうちむへまりかれともかんとそ
菊の花のうつろへる後男のもとへ遣る
かれかねに白露の置るしるしの枝をとそにほはる　うや
男志らまそよかんにはるまじきちら
かれ物事に白ちよ花の菊ハ霜をうけて人の袖くともみる
本意はくしてかそまよりけつ
さのえあともあさ志れ袖乃志くあらん

やよ時雨物思ふ袖のなかりせハ木の葉の後に何を染まし
まそてもる世とかや達もてさ
花ちるとこ山乃扉を又別るく
春風ならば白雲の花を袖にかはれ誘て吹あらしの世や
まは送んとまされも人の衛
色送ぬ月も夜つるあらそと尉らく
よもかれあそでにそ送つれとハ思へたねうて袖に
大かたの空とも見つらむ物わかん
月とともめてしらとひしさそうら梅

[illegible]

思ひそめしよりはかはらぬ[illegible]

[illegible]の月とともに

今もひとつもせぬ[illegible]

一その歌乃傳[illegible]

去年[illegible]

雲路とわけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

山里はそこくもまつるまれに

野辺はもとめてさしもとめ寫葉

[illegible]

○ [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風さそふ花の行方はいづくにか
ちりはてぬらん春の暮ぬる
春ゆくを惜しみあへるとりの
音の聞えぬ里の人もうらめし
風をのみ待つ花の心はつれなくて
散るとはなしに春の暮ぬる
春風の吹くにつけても春の来し
方を思へば恨みぬるかな
春の来てかすみの立ちし山の端
に月の出でぬる時ぞ恋しき

とし頃はまして去年の今年の春にて
春の野辺をたずねてとはばいかん
春とて人の行かぬもあるものを
花ちる比の人ぞうらめしん
山陰は行方の人のうもれ行きまれに
月をみるかな
あかつきの月をうらめしてとはむ
はるしとは思へど雁は帰りぬ
雁と思へ帰るとて雁は帰りぬ
月をみるかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十一

一首歌よ折まりを[illegible]る句

[illegible]

山寺れへあひの猪とうしたり

あつまりにうをの[illegible]紙因ゥ寺　貞徳

山寺れへの金[illegible]八入相乃猪ゥ[illegible]

光紙因乃[illegible]ハ扇也

あつまりゆる猪そうそう[illegible]

思ふよ生の[illegible]

[illegible]

[illegible]

○　[illegible]

世の中ハ藤よまむ虫乃啼よそて
海士の刈藻よ住虫の歌のやさしさなりけり世と云ハ縁
秋風ふけと我乃あはれころ
独り見る姨捨山の月なれや
歌人ハ多くさらしな更科や姨捨山ニて名月を見るとそ
是よりて古歌乃本歌取十作也

廿二
一ことゝ云句ニ付様二種ありとめて付句
あハれとも思ひてそ人ハみなるめ

ねざめはうる獣も啼なりけり　貞徳
はくしんハそこのひくとハ
それらしハ獣の宮をとらへて
人それ人をといふむといふまを　同

○
貧なるとおもひぬ宮紙忍ばる
梅で花乃花をわすれて結
貧乃宮紙ハ学ずみせよとこそなむ吟やまこと雑り
雪降る大名乃梅けるとて
秋もそ人乃たかりひとはなれ

雉もしみなんとか侍く春の色
俳諧停止となりもしてそなきを
人ことをと羽をあるかにまきすらん
露そその是れ姫乃手枕
山ふかく月ハ入野の花もさく紀
さ細みのいろ野風露猶尾花のつか姉乃手枕みせん
とにかくとてもそあかうなきらん
松かさそ数寄ふ山よとの夕附敏
花てその事を志賀乃あかる里

若きとえん乃こるもさ俳諧なは
物のひまそとひぬるをそうくらめ
せめてちかきやもし書なとかめそ

五十三
一とりめぬ付様

うかもかそれハ猿とてそちかれ
花乃春ある里の林乃桃の夜　守武
秘蔵乃花の枝とてそ折まじ
茶湯者乃春乃始のちかれ客　貞徳
流れそそれしねかかすらん

[illegible]

[illegible]の月やすらにてあれ

[illegible]羽の根小倉山

[illegible]

[illegible]人の居よりあるやうにて

[illegible]

一[illegible]と云句より付て紙二枚作り面て付句

大[illegible]に[illegible]

[illegible]花の方は瘟病[illegible]て　貞徳

[illegible]のてくまに[illegible]

[illegible]と[illegible]て　句

[illegible]の表とハうひとさて

[illegible]ぬ方をはく人俺ぬ

○

通くれてしにはれはまれてて

[illegible]

人[illegible]の山[illegible]の[illegible]

[illegible]の山[illegible]関寺の人やとゆきぬ[illegible]

[illegible]

法の場人を教へ給ふて
さとりなる世界中をうれ
ばかりをいふ人も面白りて
一そにそなて付句
あるとそ川乃ふちあるる
風もをとはられわたりとまりて　貞徳

○
もうしとたのみ神を参れば
星いわれて死のゝ仏すなる野り
海士の衣をそ又ふもあれ

ちかれる彼と思ふふしきて
とまりそまとれあるさをうけると
人とまりの宿まれたりとまを書て
一ひとりせんの人海橋ふ有里業ふふうれと
と云義ふあるもとあり
秋ありとの山けさ月かさてうせん
ぬをとんちり海ふ田山こし　定一
中ありふとびさてうせん
後ふうしあるやなのをも　貞徳

○
えんしせめて哀とかくまし
法まうまさハ男にいさ庵ともいはせん
よしや末ハ花のひらく法め
男まつわうんにはちまこともいはせん
法ふる春まつくみの千郎
人ありるめて妹ともいはせん
前句まで前も同し事也
男まはゝ比んあしひいはせん
ともせめとへの鳥とおもひたよ

力不及候とらせんと打捨るもあり
をしてや山ハきぬとともいはせん藤乃宿れ稀の夕雪
義ちら気たくわりのひやる床
悪路かともあるへ閨ともいはせん
庵ともまくし風へしをうる
んなれ枕の寝覚とはいはせん
いやうつしめようんと思ひ切て打あけよ
まる句也義句みも
いはせん死ともいひきかしの雪

空七 一物ごとに二月の物を南て付侍

山のかくみは何ぞ

海面にてはこれなりと中物と

真徒

空特南にこれは面白そう

義人といふものにたゝる物は

白

ゑてふ小町とうちむしろ

白

○ うゝ世の中にはもあるべきなれ

ちるぬ花をぬくもあきものと

うく散うちやゆきまちぞん

下 空

言の葉とゝはくもはうゝ世物は

ちりうくしもはこれ乃新

樣の花をうゝはうるものと

面白にうゝも同じ物付侍とうゝ

陸奥はうゝ國をゆく物は

あうやう乃ちうゝ風月多

人はうゝ人は我ゆ人あるものと

空八 何とゆこゝにうゝ世をうゝ

一又うゝひゝく付白

物ゝ[illegible]とゝの所に村生とゝまを
結んとゝとゝんと[illegible]物を
○ 月のあるゝん[illegible]物を
[illegible]物を
[illegible]乃つゝやゝ
[illegible]ハあゝさ物を
[illegible]花のゆゝれさ
更て[illegible]ゝさ月もある物を
[illegible]乃ありけさ
[illegible]

廿九
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
○
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

さて一筋乃行りひまもあり
花乃枝と木の素よりと絡て
あらぬ紀部ハさて社のう野
下葉ちる枝乃月乃出時
一又さてとさてあること云心よ付ける句
たく月乃光のちてくらく
見てり野ハ鬼あるさて仏乃庭
あんてみまるハさて雪乃色
うゝすれ未ハなれなる宿乃為

○ 滿てさてハさて野色乃松
雲雀鳴春乃光生に里ありて
戦山とさて月を入あり
人住あ春と乃宮乃山麓行く
海ちさ乃橋春乃影よ紛て
横雲ハ月乃数あり中乃月
神乃あるさハさて姫の水
夕乃春略さて川流乃市乃麓
うてあるハさて藤姫草

湖乃江すれの春ふし蔵く

主
一関ふ付る句

いにしへ古郷へ立ちてくまもなく
歳馬ちてくまもやまぬ勝乃り
ゆるくとんもち春ふ春のうち
花ふ泊乃うへの市を常
むんまちそいに春く
ちちちやとの主くう元乃そこ
竹乃ふ民蔵の春へ行とさて

大まるよ年新ふれのまき梅　点流
今乃せまてもまの人神晨
七賢とうるひにあちてて　友仙
はそ世紀いるまに一りにおて
ひまるふてそ乃小角豆ふれ　点宝
又とも紀しに泊とうまり
海士人の乃かうちひく　点一
ふ乃紀春行やとまんたくされ
あくいうも紀のやにぬめり歩のき　季吟

○

ようこそやとりをもとめて出たる芝海
苔のうらもあるはりとりをもとめ糸　寒巻
但者ハかくこの庵乃ゑのこまて
出井ハ清乃月ハ
これもいまたしらぬ神垣
秋毫ハ紅葉をもの色をもとり
ちとも今乃行すゑくらん
雨霧むすを山嶋乃衍すまて
神垣とりをもとめるおろれさ

寒二

くの灯清くこそる秋すり
一すもとをもとをかたをすまて付秋
秋乃くもとをもとをかたをもとをてを
ゆくくとをもとをくくい庭すりの付
ゆくれて寒をもとやさ臘月
ちとをもとをかたをもとをもとをもとを
ゆくれをもとやをもとめ乃鳥ゆくすり
月さハくゆくゆ山下乃ゆをもとり松
撥すをもとを秋のはくさをもとをゆく

草枕寄ことかさ乃やさしひまそ
花もちらさじとなんをぬ飾りか
月ならて出れハ御る志のうゑに

字三
一てハと云字床探り付る事

かまよりおもひみぬさきからよしや物
基てハ月もあふみのそら絶せる
打ちるさるや君乃はころ
思ひしとハ下志てハ又丸く人
西雲乃朧藤の花そ寄けき

又浪り清しくハ出えて龍雲
一筋の思ひよりくもちのさてよ
と絶ゆるハ又花りや手寄

寄ても
いろいろに結てハさぬる物ゆへにかくれきこえらされ
忘てハ打寄けりて夕くれ我のこゝろ寄そてゐる月せと

字四
一又と云字に付様

又おもとの松浪打のかられぬ
くれくちおもしろひをとるへとれて

又このころハ分とそうるて
しとゝ世ハらんとゝにとゝれあ
又とゝ〳〵の海もあゝとれて
ゝゝとゝとゝ花々ともたゝ
又郭ゝ孤ゐとうし
雪乃ゝゝ雪乃山さとに
又ゝゝゝ〳〵きせとゝも物もゝゝ
今一日ゝゝめゝゝゝゝゝゝゝゝ
又ゝ花ゝゝ神やゝゝゝん

ゝゝひゝゝゝ分と一ゝゝに接ゝて
又ゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あのゝゝ雪乃々のゝゝ花声
又ゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ花ゝゝゝゝゝゝゝゝ
一ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
合ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

打ちて遥かハせぬ去の方
○ とく鶯の啼くの声
村鳥ねぐらやもとゝ鳴ぬらん
去の方にたに鳴ぬ打く山
声林し霞の中にうゝもれ
んもれぬるのうゝ山下
空ゝ雪ゝ越の夕ゝを
とうゝ鳴るゝとうゝもれさ
物の声ゝもんと鳴ひく

いつゝ新るゝて取り乃声
和ゝく花月雅西ゝ部ゝ
るの言ゝ中ゝしぬ方と格勇に
山部ゝ云ゝ
一花ゝ花の名紙付板
秘花乃花枝とゝて打連
ゝゝゝんとゝゝゝふ友乃玉掛
花乃ゝゝゝゝゝゝあやゝ化物
雲ゝ咲雪ゝゝゝ児稚

まとハなりぬるたちばなの花ん

梅と題り俳諧詩歌乃男

うえと市兵衛くく花とてみる

ちりちる梅ちりとたりと弟の曲　点徳

蕭とうそに丸ぬて付ると梅ちりあるとと弟とと点

まちくぬうそ花ぬ梅八弟の曲乃名ると花ちと特

に八笛の音に梅つ落ると俳句を端盃角連雲起

鉄鑄梅花赤新魂乃やうの彩ひ多ー奇ふも

天川まみちとと二落せちや七夕はめの杖とも乃

ゐ蒙と梅ま落ちとまハ花事市る紙二星乃ゐ

毎ふハ杖ようられハゐ蒙と梅ま落ちとも花と

物ちてゐ蒙れ梅のるる酒のやうにはめ宝宝り奇

天の川ちふ花其にちくうんゐ蒙の梅いちりやちくにや

入おのうねま花ちちりとゐるも同心也古果ま白い

ひはをまるるまハゐくくとめめちくくとも也

又象白花の時脇ま花多を付る事あれ象白の花

八梅ちりたくさ時ち郎ち市ちくくあしまとたゐめう

市ちも物白牛八九歌とちるまも象白にちくうもと

辛七

一枝の白玉ちりて枝もまた一方ならぬ形ちなる
ひとしの玉とぞ見ゆる
百累とぞ名せしかんのみち　大澄
春雨に花はぬれぬ所なれ
雲乃浮雨にもぬれぬ霧のうち　貞室
色姿ともに知るべき花なん
もとの建原市に入りぬるの
さくわぬ人をてをもを鄙ふるこれの市とぞ
名年はるのうるとわかちよ

○

なもとの和原氏乃中れんとくれ　貞徳
ふるの乃人うてゆうもやや
咲花をあの下紅乃そめて
まえりこのやく紅乃世をう邪
山里はやうみをあ遊ぬ花よ春て
乃髪乃白く咲ましてなて
乃ゆやはうの原男うゆくもを
魂ハこの世よ紅とくまもて
天乃あるうとの雲ともたなれ

いとしの日の影とうく移りハてや
いねてその雲根乃郭戸押ぬく
行くとしもはるこそハんてよ清りへし
新鳴寺紙果てをうりをんをたちや

六十八
一小影と云句

きれめる紙ひろへ角のこ盃中
別いうく実ゥ志ひりハ面をきれよ
色てハやめんかの乃交ヲ
行くれるに茶と色と格く

○ 格ゥ多ハ春深ゆ居て
深世乃月よりしてあるし
清ハうゆへきれのひあるや
きれくを多を枝ちく龍宮
我すむほとやゆ山紙くちん
茶の雲ヲ面ひくく苦ゥ居て

六十九
一鬼城の句ハ云ふとてもうるくた
巻山乃絵ハ二幅一対
柄敬ひくぬきに温茶入至て

名こ山と寒さんとをかと温泉分くらと絵八柄砂の
柄ゆるあと二ゆく八葉ゆるこ一対八ゆくにゆる
二ゆくゆるひとあるゆくひく
ゆ絵ゆくへしみきるとひくらとれ服装　真徒
ゆくひくゆくをゆけく天人
面ゆくゆく表の薄江乃浦さひく
ゆけたに写れたに家ゆて葉ゆる
武士のゆくひの矢ゆるを牧源て
ゆりゆ形ひのちやさみゆく

十九三〇

ゆくゆ義れゆくゆあくゆて
一付ゆくゆを云ゆる白猪ゆ家ゆるとの時ゆ紀地
ゆれ出ゆ名二条ゆり弟ゆ
代を絵ゆて寺に八やゆ紀泉家
二条家別て冷泉家ゆる為家のゆ為相と元往
ちゆとひて八あゆ紀ゆけゆる
せいりんのゆくゆや池乃ゆ蓮　寒山
又清弟ゆ生ゆんやゆを
ちゆ出ゆて八ゆされゆれゆやと　寒山

○

最乃きてそ花の宮中
清水や舞殿はれ雲り立出
来ハ廣くも何毎ゆくそ
一すちの雲紙をひく初て
高とわく道の風雨
滝は激の高音ふり出て
去筆ゆむ野辺の春さ
花ハまた咲ぬ東法乃下蔵
そやみそうまて紙うて山の陰

雲とみて明日の花乃美えく
咲とく高く雲もそ秋を
高野ハ一村落ひとり松
さ高そ千里に長り書
乃の鳴さ明乃月り起初く
すそハあやそ紙のそや川
高ハ一まち滝落て
紀出てさを小と云地滝落て来ハあるとそ地
一ナ一 まてと云ま不拾意付稿

くまなくとゝのへぬるをもてなすの
事和よのる傾城の数まとゝ
ゝへいりまして色給しけるひ
化ゝいろうの度有うゝちゝゝ
月ゝ花園のゝゝゝゝいりまして
末のなれおもしろの風の声ゝて
世ゝあるまてとゝかゝゝ人
花の浪仕へんゝもやゝゝゝて
いりまして苦れゝゝ風あるしも

武義聖と行ハ林ゝをのまて
いまゝゝんまてやゝゝのむ彼
ゝのゝ乃ゝゝれ枕中記月
山まてとゝゝちゝゝとゝれ
蓋はゝゝゝ庶ゝかりひの海ゝて
一けゝゝと云ゝ余於蓋ゝ付稜
こゝゝゝ苦ゝゝ苦れゝゝまり
山柄ゝ胡桃とひゝけゝたり
いゝゝ苦ゝ歌ゝかゝ下女

火焼石を鍛冶つかひ続みて
秋をしるたるまくらしそ
とはの家をも山下れ草乃庵
やまをもるるをもそめもけり
ゐやとなる山紙とあるれ草れ庵
一けさと云る条抜案り付るる
とりとるる紙乃清守
紙をして新しはるを役をる
るけハのとも紙拙まる紙声

九月九日云云朝礼あるる
山里乃さやを紙月よ人ハ移て
紙や本業のうるもうりらん
るもハさやけ紙源乃者
毎下伏乃人の月乃更る秋り
神代乃月とくやさや紙
天の乃ゐ乃ゐるる紙林のるる
るるそのとりる故郷のあ
嘉ハるる云のゐるる行れて

一ゝと云まを不拾遺歌に付て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本文

一ゝのと云詞を付て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はるんさんぜんと行とやけん

白川乃関うしゑ人面るえり

役あるいてそ部につきやらん今白川の関ふこゝぬと

の

これあるそとやんやうらん

そのやうれぬ春れ製る桜ふ其く

この山ものとも春来ぬ

秋寒し烟を浦ぬ接乃屋と

色やこれ春をうしれ見紅私

ふきをしさうひる浦山陰乃月

カイロ

(下)三十八

これ宮浦川のそらもれの浦

春のうるうあ乃わと花咲く

辛六

一ふかのよ春行寒て付る接

うとそあもしお別乃ひにあとうひ

あけそれよめ代くむ志うとめ

ふそめうそうやうやうやうぬれ

我思ふお児乃ふあ色よ見ふ

さうふうとしうしてを行

方の大事とふそりんの安あしめ

○ はるのやまとうちしけるかすみ
春のうちもかんの行きあはれて
さくらの花のいろいろうつろふ
はるこそかすみ世と雖面も我出く
一はるのよ木花を書て付侍
人れも場合れ立はくるり
一はるの数をもかすみけり面
ちるのうちに又ちるのうち
うれしとはるの花ありけり

下三十九

○ 行春をしたしまれて名残
春のうちをうつりゆくはく
これハ朋輩の宗匠ゆくひとの
をしみて文書に風吹く
洞ゆうれいの行のあるうち
ちるうちの春のうちの
いろふ出んとわるの世の中
源氏中文麻呂山とうし
一春旬の未ハ字のうちと南ちへ付侍之十

文十八

文字付なとり方也

数多の人乃さしたる歌詠
歌みてさしたる事なとを書給
ありてたゝ[illegible]のあるか
のゝ[illegible]なり然乃住てよ名のわく
のゝ[illegible]なり乃川あ
○ のゝ[illegible]にもある去乃川あ
[illegible]乃月の影見て
[illegible]
立ぬ[illegible]

あゝ[illegible]れ魚乃数く
引あ[illegible]て[illegible]る夕の海士ふ舟
[illegible]遠ハ寒もの[illegible]
引捨て廣[illegible]
社乃夕[illegible]ふ[illegible]
[illegible]

三十九
一[illegible]
[illegible]
[illegible]
未乃世ハ儒[illegible]

けう物うとぬ声をうまうき
一度うて又ゑうて寝ていうあん
○
まにあうれうるうの時声
ゑゑに雲刻とと雲にうきて
けみあうて花りめ〳〵乃人
字母人さんのわくと文字及て
磯山うれまうまけううり
路る移りる測海は強物をれて
まにうてぬやりうをれ爰

ちうをとれハ流りうあるは作く
一みと云文字とあうにとれ物て付る
いうさにもうむ武士れいさりひ
せいひけりの古代八書籍と役うて
まうはあうりりまてんちうくちむ
をううぬ火雲うりうる雪の花
○
保山うりむうみ云のれりけり
古里乃庭りる花落るの時く
れうへのとうにかれる春雲

植えしの庭の秋はまうけれて
萩をうつしにうゑ置うゑさ
年をあさりきの色はなとはし
をうり一花さきあるをてこ
清水やく芝居の月八文字にて
柏野乃ちに山風うゑく
玄宅紀乃下草とえ偽て
風や柏野乃ちり吹こん
をされ八苔乃花ちる夜千海

八十二
一句乃事りに付稿
うちもくちむも独ちりけり
山陰りもやる程乃くしはき
ちなりしとちるんちりあり
○
俗俗し市乃居り花咲く
打りへし高れやとちりけり
寒りみるを冷しき野人の月
八十二
一ことの字り付稿
ちりね乃とうに成とちく

第乃大事をされて敵をしたがへて
ふれとゝろやく男とかをとりする
はるかなるや御のたらかれあるこゝ坊
我古里と名をたゝへける
千ゝ枝に末もれ野にたゝもしん
別淋なる松やを末と知あらん
玉砂乃月を夏のこゝゆき
伯山人と男にかゝるかをとに者り
枝垂に夏の山松乃陰あるあ

八十二
一ふれと云詞より付様
これを位をはるん宮方に
義をとゝ者りふ八ふ野乃位井
ふれて大事にゝ所合張
ちゝひてもある義面八何あるを
○ これを形見の袖乃ゝり者
俤八ふ乃をを手ゝ位又清ゝ
ふれみよゝてやゝとゝす宮失
夜第氏陰より玉ゝ毛ゝ花咲ゝ

八十四

一ことてやこの句より付侍

ことてもとの風吹きの大風

のへもとともいさや花みよりゆん

多くしさとてもいやしめるそ

世上の将由新よりあるものと

○ うたをるあとてうちゆらん

清流をしの和歌八月ゆきそ

ことてのこと神ぬしけん

数くのあるとおりのよ和歌

桂とてうの一本のうとす

秋の空八月とて花と紅葉とて

名のしはとても我とあるん

うたをやひとつの時にはひるん

とてもあ路とあしらやせん

後乃世れ後りあるとひらかや

八十五

一上乃白れ赤の五文字と付句れとて人侍

ひとつ鳥打ちるしの下ことり

日まりと賜う桂とまくころ

○

一本あもれりそる林の野
池よ住穂乃蛍と共にそりて
接ひ[illegible]ものやさと乃やさと
雑よるく片山陰ふ桜とのて
あるる雲雀そ春さそ[illegible]れ彩
出の春もしら春と安父吟て

略そ[illegible]野人乃ら[illegible]ま
又付白ふ乃白ふ[illegible]
そ[illegible]岩独の春乃花
人を岩接ふ[illegible]里に[illegible]て弱て
八十六
一成敷のよれよ糸杉墓て付頼
う花世の中よあんとうてんん
楽さうと思へと山も春時て
もんやの変よあひも彩まん
思ひてはとそ海うあるにて

○ [illegible]

[illegible]

[illegible]

八十七

一ゐとのよふかたはらよりの付句

[illegible]

癰疽やとうけくさむほとゝもてあれ

のうとれかとハきもあぬ人乃

いやしきをもてをとりけ倒をて

○ わりひちくちひかとれ袁さ

いるとあをきをとをもをて漢帝に

いくほとあるぬ為をて俺ゐる

明日ゑふくあはゝ契乃をもや絡く

むらひのかをとれ果をそたをん

雑毒とををたに毒るくんをもう邨

八十八

一ゐとのよふかたはらよりの付句

ゐと代中は書法をもる死

春りあひををよれ方人新乃ゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八十九

一さてもとゝ云ふ花形

(下)四十七

さてもとゝあれ花のあるじや
[illegible]ひらく梅は枝
[illegible]の人乃ん中
[illegible]

○

[illegible]と限り[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]やひしとの系
[illegible]
さてもとゝ[illegible]の法

松の葉を唯朝夕の音ものこそ

一九十　つゆのよ不枝葉を付積

淮人の舞ものこそいとをかしき

あやしの為元のたまもるる者　成利

人ゆへいとてちるふるころかな

元盛ア千とて水いとをかしく

おもしろきもいとをかしき

ちりぬるとはさしも風ものこと

人とうれといとおもしろん

ちれたる間を落る松の月

実りのつゆとともにこぼれん

あちこちのやどひのそれぞれの居

月ともそちらもいとねもしん

西をそあるすみにを松の実に

九十一　一同答しそる付積

そのかれ元深　禁中

若人のお樓乃藤夏いとあるん

いまはそあるさいとけるる

わらはあてはまれる碁の奉に
○
ゆゑ祇と世やはくもてまし
恒とも世ゆゑにいひなりて
結果のそくとろく仏とう養まし
最越う者り　推乃義の者
せめていふ乃義にそたとん
あれ法ふん頃そくもひとりねて
九十二
一仏と云河り付板
我ちんちう仏りそとん

下　四十九　(1)

苦しきに修とく悪の幸
仏とうとうに義ゆとまし
義ハちの義乃義ハとそ河分う
○
しれのまや仏りそとん
結果の清め法ちとも義ちりて
九十三
一いとくのまに結義り付板
まそそいとくとうとん
や法とりりとりひそめふ祇
乃そそくとう義白らうさ

○

我と君とけくあかぬ秋の夜
人とまてやいとし浮まよひ
あはれてつひにやまし秋中が竟
見てそいとし悪つかまされ
女人の唐よ詠む歴まさらう

九十四
一ちるまと云よ朱稚羨付積
こうきぬてるまちてと情あれ
悪しゆしされ今ふいていさ常乱と
時ぬるてちるま植ことれ家

○

ゐさらし将よ深しさ風ちく
うち深ちるまにむよ貸
それ家し物色をくさかし都ぶ
まれ乳ちるまちう紀智のき
恵湯と秋あの妻れ雲よ見く
そうふと深ちるまとみんゆる貸

九十六
一羽衣付積
夕月秋袖まるかける山越く
神くるまてそあきしとうられ

彩色〜仰のこと〜ハ落とけて
みんな〜れ変とと〜る事の擅
ま〜〜に飛て相模とる〜る
山〜てもそ〜〜う氏ハタ者
○
九十六
一南人ま〜ひとま〜〜〜らん松のを
一ゐ〜ひと云須よ付稜
仰法ハ寺氏盛昌ろ〜る
大度の稲ふや家り南ま〜ん
〜ひ〜むと〜れまる〜る

貞治

榕に入物ま〜にて〜〜〜みる
雲路と人〜氏雲乃ま氏
○
去年〜〜すめハ富士の行ひて
萩の下葉乃〜〜〜ひ〜る
〜〜枯の野路ハ氏川ま〜れて
九十七
一ひそ〜ふのよ木枝葉乃付稜
さて那ふ〜めハ花の浴中
夷ひ人教思葉ま〜る去れ葉く
ひそふ淋〜〜〜ま〜ん月

あかしかた沖にしほあひに月なくして
浪こえぬ山のはの見えたるにはるゝ宵の月は霞き
人乃園を行きおかれしき
まつ人せよあれは山路の郷云
さそふかたてとらやもりえん
須別て声ひなびたる郡人

九十八
一名所とする頃
蛤とあまれぬ玉の浦つたう
去年此落葉のとる舳の玄

貞徳

大雪かれ麦一乃名あり
新広し年安城の華やれ月
遠鳴松のみすじおきほの
浦やしぬ淡路の山は雲にかくれ
霧わけ志賀のうら湊
都の夜みなしの山わけ鳴て

又国を隔てる名所
あにと難波のうらこそ遠懐
淡島山あさくいかひまんとせん

季吟

あるて清の寺　あるさう山のことれたこうもて歌
ゆうこの又毋やうそてあ海のりめしもは
○　分り来のうれきむさ一雪
白川とうこれ関よちんこうて
うこうもへあるる山うれ嶽とれ嶽
毋ちれはくことこの海つう
九十九
一南意刈砂の作
鐵り松そうはくとたる
そくうしこそうれよあうう砂さ　そまた

（下）（て）五十三

うこうくこうもうこ山のうこ
そうこうとうけうあうう門の戸
焼やうこありこめはうこあり
嶽りこの海りしあうこの神社　西彩
うこ毋ちうれまれ山ゆと
まる都乃松毋の煙　沖り焼く
うれて焼りあうこうる
立月毋の西る川　御れこて
一日とうこう板

うちのさとびとやはらぎて物言
ひしりやあるとの仲そのまゝ
○　書るまゝてやうとともたのまん
朝朗あり物の法とかゝ
ゝくに人乃為るそ
為をしたる新の下業れ物く

四一
一一書と付換
三ツ月分るへとる
ふまをもをそまそづたて

○　法生をそこもくやく書け
皆人乃あるふハむ月をたるふや

百二
一三段切の数句

○　極ハひるの花ハ女にみちる事　清優
附ハ春ハ云ハ堤をれさる
五月雨ハ嶺乃松風若の水
月ハ人千年乃清んそ

天下太平ハ云いつくす世こゝの初
のこれ豊なるハ富士の鶴とぞ
そひあんとゝ奉ぶ○よそ豊のあり
ぬるくみて弥よ鄙ぶりと
まれる中ぶりく鉢屑集
こ段ひとくハ数句ぶり
と段ぶりの事のあ

連歌に有心と
てよれとも
ゆよりは通の
と千ふ
めつ
る中に
つ

ちやうれんの色深くしけんのうちにあらはれん
と感しけるをもみなおもひをかんしく
ひらきたまひしと氣にかなふけふのこと
まことにあはれとおもひけるとそ宝字
右此草紙洞下季吟書

万治二暦長月廿日

寺町二条下ル町
西田屋兵衛開板

寛政元年